

万葉論

1章 第一巻

九州天皇家終焉への鎮魂歌

持統（九州天皇家）の代の歌

持統の代は二つに分かれる。九州天皇家時代と690年奈良遷都後の藤原京時代である。ここでは九州天皇家時代の歌を取り上げてみよう。この時代の主役は柿本人麿である。

天の香具山の歌

28 春過ぎて 夏来るらし 白袴の 衣干したり 天の香具山

天武に十三歳で嫁した時、持統は九州天皇家の都・倭（田川市）に住んでいたと思われる。壬申の乱では天武と終始行動を共にし、勝利に大きく貢献している。天武は列島の王となり、大宰府に入って天下を治めた。

さて、この歌はいつ頃詠まれたものであろう。天の香具山とは香春一の岳である。初夏を歌って瑞々しい。また持統の感性も瑞々しい。これは緊迫した壬申の乱の最中に詠まれた歌ではない。

また壬申の乱の後、大宰府にいた頃に詠まれたとも考えにくい。政務に忙しいこの時期の持統に初夏の天の香具山の新緑と白い衣に心を動かされるような余裕はなかったであろう。結局この歌は持統が天武に嫁した十三歳の少女の頃の歌であろう。九州天皇家の王、天武に嫁いで幸せな日々を送っている。

ああ、この國の人々はもう白い麻衣を干している。もう夏なのだ。私も夫のために夏の衣を用意しましょう。

歌は九州天皇家における持統の人生の始まりを象徴している。のちに大変革の時代を国王として生き抜いていかなければならない運命が待っていると知らず、つかの間の家庭的な幸せにひたっている少女の持統の姿が見えるようである。

近江の廢墟の歌

持統の代の第二首は一転して、人麿の廢墟の歌である。人麿は持統の時代に生きた歌人である。人麿は九州天皇家の石見國（苅田町）で生まれ、持統朝に出仕して多くの歌を詠んだ。

近江の荒れたる都を過ぐる時 柿本朝臣人麿の作る歌

29 玉櫛 畝傍の山の 檜原の 日知の御代ゆ あれましし 神のことごと 梅の木 いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 天にみつ 倭をおきて あをによし 平山を越え いかさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此处と聞けども 大殿は 此处と言へども 春草の 茂く生ひたる 豊立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば 悲しも

反歌

30 ささなみの 志賀の辛崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかねつ

31 ささなみの 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも

この歌は滋賀県大津市の「錦織遺跡」を歌ったものと考えられているが、そうではない。壬申の乱に敗れた近江朝の廢墟を歌ったという解釈は全く外れる。そもそも人麿には天武・持統が生死をかけて戦った敵方の近江朝の都が廢墟となっていたとしても、それを傷み悲しむ感情はない。

天武は敵方の太政大臣を斬首している。厳しい態度である。反歌の大意は「昔の人に逢うことができるであろうか。できれば逢いたい。しかし逢うなんてことはできないのだ。」である。人麿が敵方の大宮人に逢ってみたいと回顧することは絶対にない。数ある万葉歌の中でこの歌ほど誤解されている歌はない。29番歌は私たちを全く新しい世界に導いていく。

「天皇の神の尊」とは持統天皇

説明すべきは人麿が歌った「天皇」とは誰か。この一点にある。

天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下
知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は

歌全体の貴格を決める最重要の歌詞がこの部分である。「石走る淡海の國のささなみの大津の宮に天の下知らしめしけむ天皇」とは誰か。万葉集の編集方法を検討してみよう。

万葉集は各天皇の代ごとに編纂されている。従って題詞に「天皇」と書いている場合はその天皇は「天皇の代」に書かれた天皇と同一人物である。

1番歌は次のように書かれている。先ず「泊瀬朝倉宮に天の下知らしめしし天皇の代」と詠われた代を示している。そして題詞には「天皇の御製歌」と書かれている。従って題詞の「天皇」とは「泊瀬朝倉宮の天皇」である。歌に即してもう少し検証してみよう。

(1) 2番歌

「高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代」と歌の代を示している。題詞は「天皇、香具山に登りて望國したまふ時の御製歌」である。この「天皇」とは当然「高市岡本宮の天皇」である。

(2) 16番歌

天皇の代は「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代」である。題詞は「天皇、内大臣藤原朝臣に詔して」とある。「天皇」は「近江大津宮の天皇」である。

「代」の天皇と題詞の「天皇」とは一致する。「代の天皇」＝「題詞の天皇」である。

ここまでは問題ない。では、「天皇の代」と「歌中に詠まれた天皇」とは一致するか、どうか。

(3) 50番歌

50番歌は持統の代の歌で「藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代」と書いている。作者は持統ではない。題詞には「藤原宮の役民の作る歌」と作歌者を書いている。作歌者は「役民」で、歌で「やすみししわご大王高照らす日の皇子」と歌った。「やすみししわご大王高照らす日の皇子」とは誰か。無論「藤原宮の天皇」＝持統である。

(4) 36番歌

36番歌は「藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代」の歌である。題詞は「吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣人麿の作る歌」とある。作歌者は人麿で「やすみししわご大君の聞き食す」と歌った。「わご大君・天皇」とは誰か。もちろん「藤原宮天皇」＝持統である。

ここでも「天皇の代」と「歌中に歌われた天皇」と一致する。

(5) 3番歌

歌は「高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代」の歌で、題詞は「天皇、宇智の野に遊獵したまふ時、中皇命の間人連老をして献らしめたまふ歌」である。歌中の「やすみししわご大君の」と歌われた「大君」とは「高市岡本宮」天皇である。

以上、見てきたように、万葉編者は天皇に関して厳格な使用ルールを一貫させている。

ルール1：「天皇の代」の天皇と題詞の「天皇」とは同一天皇である。

ルール2：「天皇の代」の天皇と歌中に歌われた「天皇」「大君」とは同一天皇である。

当然のことながら、ある天皇の代に、その天皇と異なる天皇の歌が入るような編纂をする訳がない。

29番歌に戻ろう。人麿が「**ささなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊**」と詠った天皇とは誰か。持統天皇である。

草壁皇子が産まれた大津宮

人麿が「大津の宮に天の下知らしめしけむ天皇」と詠んだ天皇とは持統天皇である。では持統が近江大津宮にいたという記録が他にもあるだろうか。幸い日本書紀30巻（持統天皇）が「大津宮」の記事を残している。

日本書紀卷30 持統天皇

天命開別天皇の元年に、草壁皇子尊を大津宮に生れます。

持統紀は662年（天智元年）に草壁皇子を「大津宮」で産んだと記録している。この日本書紀の「大津宮」と人麿29番歌の「大津の宮」とは同じ宮である。では「大津の宮」はどこに存在したのか。日本文学大系日本書紀下頭注は「筑紫の娜の大津」としている。博多港である。持統が草壁皇子を出産したのは琵琶湖大津ではなく、筑紫（博多）の「大津」であるという理解はそれほど外れていないが、正しくはない。

- (1) 持統紀の「大津宮」と万葉29番歌の「大津の宮」は同じ宮である。
- (2) 日本書紀は「持統はこの宮で草壁を産んだ」と記録し、人麿は「ささなみの大津の宮に天の下知らしめしけむ天皇の神の尊」と持統の統治を詠った。
- (3) 「石走る淡海の國のささなみの大津の宮」は持統が草壁皇子を出産し、天下を治めた宮である。

この二つの条件を兼ねた「大津宮」とは琵琶湖大津に存在した宮ではない。

九州天皇家の都、近江

反歌で「志賀」が歌われている。「淡海」と「志賀」の歴史を少し遡ってみよう。

「淡海（近江）」の「志賀」に宮を建造した天皇は景行天皇である。景行紀は戦記である。主な戦記は土蜘蛛との戦記である。その戦場はどこだったのか。小倉南区である。小倉南区にはそのことを証明する数々の史跡がある。小倉南区には景行が登った大岩（帝踏石）がある。景行戦記に登場する「血田」とは小倉南区の「津田」である。「血田」が「津田」と訛った。小倉南区「津田」には景行が土蜘蛛の「責」「白」を殺し、その頭を葬った「上塚」、胴を葬った「中塚」、その他を葬った「下塚」が存在する。

景行天皇は晩年土蜘蛛との戦いに勝利した「近江の志賀」に「高穴穗宮」を建て、この宮で亡くなった。その跡を継いだ成務天皇もこの宮で天下を治めた。「近江の志賀」は景行・成務の都であった。景行天皇が宮を作った「近江」とは九州天皇家の「近江」、小倉南区の近江（淡海）である。

時代は降って、万葉集が「近江大津宮の天皇」と書いた天皇も、また、この「近江の大津宮」で天下を治めた。「近江大津宮の天皇」とは日本書紀の「天智天皇」ではない。小倉南区の「大津の宮」で九州天皇家の天下を治めた九州天皇家の天皇である。

人麿が歌った「淡海・大津の宮」は景行天皇・成務天皇・近江天皇・天武天皇が天下を治めた九州天皇家歴代の宮であった。「天の下」とは本来九州天皇家の支配地域を指す九州天皇家独特の用語であった。

持統もまた「近江大津の宮」で天下を治めた。人麿はその統治を詠った。

玉櫛 畝傍の山の 檜原の 日知の御代ゆ あれましし 神のことごと 柂の木の いやつ
ぎつぎに 天の下 知らしめししを 天にみつ 倭をおきて あをによし 平山を越え い
かさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津
の宮に

ここで詠われているのは「倭（やまと）」から「淡海國」への遷居である。神武は東征後、「倭（やまと）」の「畝傍の山」の東南の「檜原」に宮を構えた。「倭（やまと）」とは香春町、「畝傍山」とは香春岳、「檜原」とは香春町高野である。香春・田川が神武の新しい都であった。

大海人皇子（後の天武天皇）も香春町に居た。ところが「何をどう考えたか分からないが」、持統は香春町から「平山」を越えて小倉南区の「大津宮」に遷った。

持統は小倉南区の「大津宮」に居た。人麿はこの小倉南区の「大津の宮」の廢墟を歌った。

天皇の 神の尊の 大宮は 此处と聞けども 大殿は 此处と言へども 春草の 茂く生ひ
たる 霞立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば悲しも

ここに持統の大宮があったと聞くけれど、春草が茂っているだけだ。ここに持統の大殿があったと言うけれど、春草が茂っているだけだ。霞が立つ美しい春の日、九州天皇家の伝統の大宮の廢墟を見るのはいっそう悲しい。

近江大津宮は廢墟となっている。九州天皇家の伝統の大宮、近江大津宮が廢墟となっている。人麿はこの廢墟を詠んだ。なぜ廢墟となったのか。

持統の代は二つに分れる。太宰府統治の時代と奈良・藤原宮統治の時代である。天武が亡くなった後、皇太子草壁皇子が天皇位を継承する予定であったが、その草壁は天武の後を追うように3年後に亡くなってしまふ。ここで持統は決断する。「私が王位を継ぐ。奈良に遷居する。そこで日本列島を統治しよう。」

こうして持統と九州天皇家は九州を去り、奈良に移っていった。持統の九州時代は終わりを告げた。

持統が奈良に移ったのは689年であろう。この遷居は「倭（香春・田川）」から「近江（小倉南区）」への遷居とは根本的に異なったものだった。「倭（香春・田川）」から「近江（小倉南区）」への遷居は九州天皇家内の遷居である。しかし太宰府から奈良への遷居は九州天皇家の終焉を意味した。

人麿はもはや誰も住まなくなった九州天皇家の伝統の大宮、近江大津宮の廢墟を詠った。そうして九州天皇家終焉への鎮魂歌としたのである。

万葉集が編纂された時は近畿天皇家の代である。歴史から消えていく九州天皇家を表だっとうこういふわけにはいかない。万葉編者は心の底に秘められた思いを倭歌を編纂することによって果たそうと考えた。それは歴史から消えゆく九州天皇家への鎮魂であった。人麿の廢墟の大津宮への鎮魂歌はまた万葉編者自身の鎮魂歌でもあった。

作歌時期と作歌場所

人麿がこの歌を詠んだのはいつ頃であろうか。持統の奈良遷都は689年であろう。690年正月に即位している。この即位は奈良藤原京大極殿である。九州天皇家は太宰府から奈良に移った。だが、移ったからといって九州天皇家の近江大津宮がすぐ廃墟となるわけではない。人麿歌の廃墟までには持統遷都からそれなりに時間が過ぎていないに違いない。日本書紀から持統奈良遷都以降の経過を見てみよう。

690年（持統4年）	正月即位。 3月20日、藤原京と畿内との人の、年80より以上なる者に、彦島嶋宮の稲、人ごとに二十束賜ふ。
690年（持統4年）	10月29日、高市皇子、藤原京の中の持統藤原の宮建造予定地を見学。 12月19日、持統、藤原の宮の造営地を見学。
691年（持統5年）	10月27日、平城京の地鎮祭を行う。
692年（持統6年）	1月12日、持統、平城京の大路を見学。 3月6日、三重県伊勢神宮へ行幸。 5月23日、浄廣肆難波王等を遣して藤原宮の地鎮祭を行う。 6月30日、藤原宮の建築状況を視察。
693年（持統7年）	8月1日、藤原宮が完成。
694年（持統8年）	12月6日、藤原宮に遷居。
696年（持統10年）	軽皇子が即位（文武天皇）。
701年（大宝1）	大宝律令制定。
702年（大宝2）	崩御（58歳）。 (下線は筆者註)

石見國風土記は人麿は持統の代に「讃岐」に流され、文武の代に「石見」に流されたと伝える。「讃岐」も「石見」も九州天皇家の「讃岐」、「石見」である。人麿が九州天皇家の「讃岐」に流されたのは遅くとも696年である。持統遷都から7年経つ。そして文武の世に、人麿の故郷、九州天皇家の「石見國」に流された。この流刑は早くとも696年である。持統が九州を去って近江大津の宮には誰もいなくなって8年経っている。

神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の 茂く生ひたる
霞立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば悲しも

大津宮の荒廢のひどさから判断すれば、人麿が見た廢墟は702年の持統崩御より後かもしれない。持統奈良遷都からすでに12年経っている。人麿が持統の世に流された最初の流刑地九州天皇家「讃岐」とは彦島老町である。文武の代の二度目の流刑地九州天皇家「石見國」とは苅田町である。

近畿天皇家は持統崩御後に人麿の処遇を再検討し、彼を故郷である「石見國に流す」と決めたのであろう。これはむごい仕打ちといえるであろう。人麿は故郷「石見國の東海の畔」で生涯を閉じた。「石見國の東海」とは周防灘である。人麿は周防灘に臨んだ「鴨山」で死んだ。

近江大津宮が廢墟となっていた頃、人麿はすでに流刑の身であった。「讃岐」に流刑されていたか、「石見國」に流されていたかは分からない。だがどちらの流刑地にいたとしても人麿が廢墟の近江大津宮を訪れることはできない。

では、人麿はいつ廢墟となった近江大津宮を見たのであろうか。考えられるのは一つの時しかない。それは「讃岐」から「石見」への流刑の途上である。九州天皇家の「讃岐國」から九州天皇家の「石見國」への流刑路の途中に近江大津宮が存在する。

九州天皇家の都、近江。近江に存在した大津の宮。
あれほど賑わった大津の宮が今や廃墟となってしまうている。

廃墟の大津宮は九州天皇家の終焉の象徴である。人麿はこの歌をもって九州天皇家への鎮魂歌としたのである。

大津宮の廃墟が象徴する九州天皇家の終焉。わが身の流刑。重なり合う二つの哀れと悲しみが、私たちの心を打ってやまない。



古人の近江の歌

高市古人、近江の舊堵を感傷みて作る歌 32

古の 人にわれあれや ささなみの 故き京を 見れば悲しき

高市古人は伝未詳。持統・文武の頃の人。行幸や旅の歌を作り、その格調の高い印象鮮明な自然体は赤人の先駆をなすと言われる。(日本古典文学体系万葉集一頭注)

「古」は「いにしへ」と訓む。「いにしへ」とは「過ぎ去った代」の意である。今、高市古人が活着ている代は近畿天皇家の代である。近畿天皇家の前の代とは九州天皇家の代である。

古人が歌った「近江の舊堵」は人麿がその廃墟を歌った九州天皇家の近江大津宮、小倉南区曾根の大津宮である。古人が「古の人」と想起した人は柿本人麿であろう。大津宮の廃墟をあれほど悲しんだのは人麿だけである。その人麿に同調し、古人も廃墟を感傷して詠んだ。古人の歌も九州天皇家にたいする追悼歌である。

私は九州天皇家の人間であるのか。そうではない。それなのに、笹浪の近江の古い都を見れば悲しいことである。

ささなみの 國つ御神の 心さびて 荒れたる京 見れば悲しも
原文 樂浪乃 國都美神乃 浦佐備而 荒有京 見者悲毛

原文では「美神」である。「美神」とは女帝持統である。故に「美」を用いたのである。「御神」と訓んだのでは原意を外す。原文は「浦佐備而」である。この歌詞を「心さびて」と訓むのが普通であるが、原意を外す。原文の「浦」は普通の意味の「浦」で、「入り江・湊の意」である。「佐備而」は「さびれて」の意である。寂れてしまった王朝の船着き場、湊の実景を詠んだものである。原文「浦」を「心」と訓むのは近代人の訓みである。神の心はすさんだりしない。

ささなみの近江の國の湊は寂れてしまった。荒廃した九州天皇家の都を見るのは悲しいことである。

高市古人は、人麿の29番歌と同じ風景を同じ感傷で同じ歴史認識に立って詠んでいる。

人麿のもう一つ「淡海」の歌

万葉集 266

淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思奴尔 古所念

名歌中の名歌と評価されるこの歌で人麿が歌った「淡海」は小倉南区曾根の干潟の海である。「淡海」は「近江」とも表記されている。九州天皇家の淡海、九州天皇家の近江は小倉南区曾根干潟の淡海である。

<淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者>

夕日に淡海がキラキラと輝いている。曾根干潟に夕波が押し寄せ、たちまち干潟は没して淡い海となる。干潟でえさを漁っていた千鳥が鳴く。

上の句は曾根干潟と周防灘が織りなす自然の実景描写である。曾根干潟では夕方になると、波が押し寄せ、干潟を上ってくる。夕波とはこの特徴ある波のことを云う。当時の九州天皇家の人々は人麿のこの歌を読んだ時、夕日にキラキラ輝きながら曾根干潟に押し寄せてくる淡い波を思い浮かべたことであろう。

曾根干潟は日本有数の干潟である。故、千鳥が渡ってくる。初秋ともなると、繁殖地のシベリアから越冬のためオーストラリアや東南アジアへ渡るシギやチドリの仲間がこの干潟にたくさん立ち寄る。九州天皇家の人々はこの干潟でえさを漁る千鳥の姿を思い浮かべることでもできたし、またその鳴き声も思い起こすこともできた。

人麿は九州天皇家の人々が住み、生活した曾根の海辺で「淡海」「夕波」「千鳥」と歌った。しかし、これらの歌詞は特に選び抜かれた言葉というものではない。人々が普通に使っていた生活用語だったと思われる。人麿は「夕波千鳥」を造語したと解されているがそれはちがう。「夕波千鳥」は「夕波」と「千鳥」に分かれ、それぞれ独立した二つの名詞である。「夕波」とは夕方に曾根干潟を上ってくる波である。「千鳥」は文字通り千鳥である。曾根干潟に住む九州天皇家の人々にとって「夕波」は毎日見慣れた波だったし、干潟の「千鳥」も日頃見慣れた鳥であった。

上の句の叙景は取り立てて深い意味をもつものではない。

<古所念>

だが、下の句は一転叙心である。ここには深い意味が込められている。だが壬申の乱に破れ廢

墟となったといわれる琵琶湖畔の「近江京錦織遺跡」に対する感慨などというものではない。関西の地は無関係である。人麿が見ているのは小倉南区曾根の海、聞いているのは曾根干潟の千鳥の鳴き声である。

「古」とは「いにしへ」である。「いにしへ」とは過ぎ去った世の意であるが、この過ぎ去った世とは現在の王朝の前の王朝を意味する。現在の王朝は近畿天皇家である。人麿が「古」と歌った王朝は持統九州天皇家の代である。持統とともに奈良に遷ってしまい、ここ近江には存在しなくなった九州天皇家の代を「古」と歌ったのである。

人麿は九州天皇家の「石見國」の柿本家で生まれ、早くして父母を亡くし、同じ「石見國美濃郡」の語部の綾部家で育てられたという。「人丸秘密抄」が伝える人麿の生い立ちである。この「石見國」とは九州天皇家の「石見國」で、島根県石見ではない。九州天皇家「石見國」は九州天皇家の「淡海」（小倉南区）の隣、苅田町に存在した。「石見」とは本来「岩海」の意である。曾根干潟の「淡の海」に対して周防灘の荒々しい「岩の海」という対句である。

「淡海（近江）」と「岩海（石見）」の二つの海は呼応している。「石見國（苅田町）」は人麿が生まれ、育てられた故郷であった。

人麿が人生の晩年に「古所念」と九州天皇家の世を懐かしんだ「淡海乃海」は故郷「石見國」の隣の曾根の淡海である。

この人麿の追憶はどのようなものだったのか。それを表す句が「情毛思奴尔」である。「思奴」は通常「しおれて」と訓まれている。

人麿が明らかに「萎れて」という意味で詠った歌は138番歌、妻との別離の歌である。

石見の海 津の浦を無み 浦なしと 人こそ見らめ 瀧なしと 人こそ見らめ よし糸やし 浦は
なくとも よし糸やし 瀧はなくとも 鯨魚取り 海辺を指して 桑田津の 荒磯の上に か青な
る 玉藻沖つ藻 明け来れば 波こそ来寄れ 夕されば 風こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄
り 玉藻なす 靡き我が寝し 敷栲の 妹が手本を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十隈ご
とに 万たび かへり見すれど いや速に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ はしきやし 我
が妻の子が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡けこの山

「瀧はなくとも」と詠った人麿は「曾根干潟」を想起している。曾根の淡海にはすばらしい干潟がある。千鳥もいる。優しい海だ。ところが「石見（苅田）の海」には干潟はない。周防灘に面した荒々しい岩の海だ。千鳥もいない。だがそこには私の妹がいる。今その妹を置いて私は京に向かわなければならない。この京とは太宰府である。天武、持統が居た京が太宰府である。この歌に「萎（しお）れて」という語句を見ることができる。

我が妻の子が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ

子どもが夏草のように萎えて嘆くであろうと歌った。原文は「吾孀乃 兒我 夏草乃 思志萎而 将嘆」である。「萎れて」という意味では「思志萎」と「萎」の漢字を使っている。

「萎」は「しおれて」の意である。だが「思奴」は「萎」と全く異なる漢字である。従って「思奴」は「しおれて」という意味ではない。

では「思奴」とは何か。「思奴」とは「品」である。「品」とは何か。「品」とは太陽をさす。同じ用法が「東雲（しののめ）」である。だが、通常、「しののめ」は正しく解釈されていない。

しののめは、篠の目で、昔、住居の明かり取りに用いた篠竹の編み物の編み目をさし、そこから「夜明けの薄明かり」の意を生じ、さらに夜明け方の意に変化したという。

（全訳用例古語辞典・学研）

このような解釈は「しの」の意を正しく捉えていない。「しののめ」を「篠の目」と解釈しているが誤っている。「しののめ」とは「品の芽」である。「太陽の芽」の意で、明ける直前の太陽の芽を意味する。人麿が詠んだ「思奴（品）」も「しののめ」と同様の意をもつ「暗い中に認められる小さな光」という意である。

従来の解釈では、「しのに」と副詞として扱われている。「しのに思ふ」という修飾関係で理解されている。ところが「しの」は「品」で名詞である。「に」は格助詞である。「心もしのに」は「心も品に（なって）」という意となる。「名詞＋格助詞」で歌は「思奴に」で切れる。「しのに思ひ出される」という修飾関係ではない。

現代においても女性の名前に「しの」が使われている。また「忍」という女性の名前もある。「忍」の語幹も「しの」である。「しの」も「忍」も「明るい」「輝く」「照る」の意を持つ女性の名前である。いわば「明子」「輝子」「照子」と同じである。もし「しの」が「萎れて」という意ならば女性の名前として使われてはこなかったであろう。

「情毛（こころも）」の「毛（も）」は、「も、また（too）」の意味で「並列」の係助詞である。淡海の家・波が夕日に輝いている。私の心も、また品（明るく）になってと、上句と下句、叙景と叙心が、順接につながっている。

もし、「思奴に」が「萎れて」という通常解釈されている意味としよう。

「淡海の家・波が夕日に輝いている。私の心もまた萎れて」となる。これでは上句と下句はつながらない。係り方から考えても「思奴」は「品」、明るいという意となる。

小倉南区・曾根の淡海を見て、過ぎ去った九州天皇家の世を思い起こした。その時、人麿の心に明るい灯がポツと点った。心が萎れたのではない。人麿にとって淡海とは単なる海ではなかった。淡海には九州天皇家の宮が存在した。近江大津宮と呼ばれた宮に持統天皇がいた。持統が草壁皇子を出産したのはこの宮であった

持統がいた大津宮は近江（淡海）にあった。人麿にとって淡海と云えば持統の近江大津宮であった。人麿は淡海を見て、近江大津宮の持統の世を思い浮かべたのである。

人麿は持統朝の歌人である。その出発は小倉南区・淡海の持統大津の宮であった。九州天皇家の「石見國（苅田）」に生まれ、倭歌の名門の家で育てられた人麿が小倉南区の宮に出仕するようになったのは当然の成り行きであった。人麿の最初の栄光の場所がこの「大津の宮」であった。淡海は人麿の倭歌が放つまぶゆい光りに照り輝いていた海であった。

しかし、その持統は草壁皇子の亡きあと、太宰府を去り、奈良藤原京に戻ってしまった。人麿はその後、九州天皇家の「讃岐（彦島）」に流され、文武の時代には故郷の「石見國（苅田）」に流され、今日か、今日かと、赦免を待ち望んでいた妻と再会することもなく生涯を終えた。

266番・淡海の歌は九州天皇家の「讃岐」から故郷九州天皇家の「石見國」に流される途中の歌であろう。流人の人麿の心は暗い。しかし、昔と変わらず、淡海の家は輝いている。その輝きが人麿に九州天皇家の輝きを思いおこさす。

曾根の淡海の家。干潟に夕波が押し寄せてくる。波が夕日にキラキラと輝く。

潮が満ち、千鳥が鳴き騒ぐ。時代は変わってしまったが、お前たちは私が輝いていた頃と変わらない。

その鳴き声を聴くと、私の心も輝いて、すぎさった良き九州天皇家持統の代が思い出されてくれることだよ。

吉野の宮の歌

- 36 やすみしし 我が大君の きこしめす 天の下に 国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は 舟並めて 朝川渡る 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らす 水激つ 瀧の宮処は見れど飽かぬかも
- 37 見れど飽かぬ吉野の川の 常湍の絶ゆることなくまたかへり見む
- 38 やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 激つ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば たたなはる 貴垣山 山神の 奉る御調と 春へは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり 行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鷯川を立ち 下つ瀬に 小綱さし渡す 山川も 依りて仕ふる 神の御代かも
- 39 山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に舟出せずかも

人麿の輝く「吉野の國」の歌である。九州天皇家における「吉野國」とは竹馬川の河口に存在した、文字通り「葦が茂った葦野」の國だった。この地名が記紀に最初に現れるのは古く、神武天皇のときである。以来、「吉野」と云えば一貫して竹馬川の河口をさす。

小倉南区へは神武による「秋津」という命名もある。神武は晩年小倉南区の稻佐の山（長野城跡）から湾曲する竹馬川を見て「トンボの交尾」と表現した。この故事から、竹馬川流域は「秋津（蜻蛉）」と呼ばれるようになった。「吉野」も「秋津」も竹馬川流域を指す。人麿が36番歌で「吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に」と「吉野」と「秋津」を重ねて詠ったのはこの故事を知っていたからである。

吉野宮はこの竹馬川の河口にあった水の宮だった。吉野宮の特徴を示す言葉が「水激つ 瀧の宮処は」である。

<水激つ 瀧の宮処は>

- (1) 「水激（たぎ）つ」について頭注36は「水がさかまき流れる」と解説している。この解説は正しい。だがその具体的なイメージは難しい。なぜ水が逆巻き流れるのか。人麿が実景描写した逆巻き流れる川とはどの川なのか。
- (2) 竹馬川が九州天皇家の吉野川である。古事記・日本書紀の神武東征記録から判断すると「吉野」は竹馬川河口である。私はそのように確信して2008年実際に竹馬川を訪れた。だが竹馬川を見た瞬間、落胆した。私が見た時は夏の昼だったせいもあるかもしれないが、水量は少なく、流れと云うほどの流れすらない。この竹馬川が人麿が「見れど飽かぬ吉野の川」と賞賛した川なのか。川の流れは神武が「トンボの交尾」といったように奇妙に流れているが、神武が戦時にもかかわらず、わざわざ見学に訪れ、人麿が「またかえり見む」と切望したような水の流れだというわけにはいかない。どこにでもある川のように見えた。竹馬川は本当に吉野川なのか。
- (3) 疑問を解くヒントは「HP」の記事にあった。竹馬川は周防灘から満潮が遡る川だったのである。これが「水激（たぎ）つ」の意味である。竹馬川は「水がさかまき流れる」川である。竹馬川が流れ来る。そこへ周防灘から 潮が遡ってきて激しくぶつかる。川と海が衝突して白波が逆巻く。水が逆巻き流れる。これが人麿ら王朝人が見た「水激（たぎ）つ吉野川」（竹馬川）の姿だった。



竹馬川河口
「水激つ吉野川」

<大宮人は 船並べめて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る>

- (1) この川のイメージは“大河”である。奈良「吉野の宮滝」付近の河のイメージではない。奈良・吉野の宮は此岸にある。そのあたりの吉野川はとても船を出して渡る河ではない。岩づたいに歩いて渡る川である。しかし人麿の歌は大河である。「朝川渡り」「夕川渡る」と歌われた大河である。
- (2) 「大宮人は船並べめて朝川渡り」と歌われている。「吉野の宮」は「大宮」である。奈良吉野の宮は離宮である。大宮には明確な意味がある。吉野の宮は九州天皇家伝統的大宮であった。
- (3) 「大宮人は 朝川渡る」、この目的も明らかである。出仕である。朝、仕事のために大宮に向かっている。そして、「夕川渡る」とは帰宅の風景である。夕べに家路に急いで川を渡っているのである。この描写は大宮（政庁）への出仕と帰宅の風景である。「花散らふ」と歌っているものだから奈良・吉野山の花見のイメージを重ねるが全く異なる。九州天皇家の吉野の宮は水の宮である。

<吉野川 激つ河内に 高殿を 高知りまして>

- (1) 吉野とは小倉南区・竹馬川の河口の葦野をさした。人麿が「秋津の野辺」と詠った吉野の宮は九州天皇家の吉野の宮である。
- (2) 「吉野の宮」は持統天皇の宮と普通理解されている。しかし、持統が吉野宮を造ったという記録はない。「吉野の宮」は持統朝以前から存在した。「吉野の宮」は応神紀にすでに登場している。応神の時代から、歴代王朝の伝統的な大宮であった。九州天皇家の伝統の大宮、小倉南区に存在した伝統の大宮だった。
- (3) 九州天皇家の始祖神武が蜻蛉（トンボ）の交尾の姿に似ていると形容したのは竹馬川である。神武天皇はこの地の戦いに勝利して小倉南区を支配下に治めた。以来吉野は九州天皇家の都の一つであった。
- (4) 人麿は、「百礮城（ももしき）の大宮人は」と詠った。吉野の宮は大宮人が通勤する政庁だ

った。

- (5) では、百礮城（ももしき）の大宮人はどこに住んでいたのか。人麿は大宮人は川を船で渡って出仕したと詠う。一体、通勤手段に船を使うとはどのような地形なのか。何故徒歩（馬）でないのか。吉野の宮が竹馬川河口の中州に存在していたと考えるとこの疑問は簡単に解ける。その対岸は曾根・津田・長野・朽網である。大宮人はここに住居を構えていたのである。ここからの通勤は船がよい。この通勤路では陸上に行くより船の方が便利ではるかに速い。
- (6) 神武建国以前も小倉南区は歴史の表舞台だった。古代王朝の二人の王がこの地について賞賛している。

伊弉諾尊・・日本は浦安の國 （日本は穏やかな入り江が多く存在する國だ。）
大国主命・・玉垣の内つ國 （周囲を美しい山々に囲まれた國だ。）

小倉南区は曾根干潟の穏やかな海である。穏やかな船着き場が存在した。また小倉南区は北と南を美しい山々に囲まれた土地である。2人の王の認識と一致する。

小倉南区は伊弉諾尊、大国主命、神武、応神、近江天皇、天武、持統と続く九州天皇家歴代の都であった。そこに天皇家伝統の「吉野の宮」が存在した。尚、伊弉諾尊が讃えた「日本」とは九州天皇家の「倭（やまと）」の意である。「日本」と表記したのは日本書紀編纂の立場が反映されているからである。

出雲娘子の歌

竹馬川の河口は周防灘である。人麿の「出雲娘子」の歌を読んでみよう。ここにも「吉野の山」、「吉野の川」が詠われている。

溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬る時、柿本朝臣人麿の作る歌二首

429 山のまゆ 出雲の子らは 霧なれや 吉野の山の 嶺にたなびく

430 八雲さす 出雲の子らが 黒髪は 吉野の川の 沖になづさふ

吉野の川とは竹馬川である。吉野の川で「出雲の娘」が溺れ死んだ。その子は霧なのか。吉野の山にたなびいている。吉野の山とは企救半島足立山である。足立山は古来、響灘と周防灘からの湿った風の通路に位置して、雲がかかることが多いので霧ヶ岳とも呼ばれる山である。

「山のまゆ 出雲の子らは 霧なれや」はこの山の気象をよく言い表している。



娘子は「吉野川の沖」、周防灘まで流されたのであろう。周防灘といってもそんなに離れているわけではない。奈良・吉野川の河口と言えば和歌山市である。奈良吉野で溺れて河口の和歌山市で発見されたというのではあまりにも遠すぎる。

出雲の娘子は吉野川（竹馬川）で水難事故で亡くなった。彼女の黒髪は吉野川の沖に漂っている。

何故、「出雲の娘子」が小倉南区の吉野まで来ていたのか。この出雲は島根県出雲ではない。九州天皇家の出雲、小倉南区曾根に存在した古代出雲国である。小倉南区の「稲葉」あたりの古代出雲国の娘子が吉野川（竹馬川）に遊びに来た。可哀想に川で水難事故のため亡くなった。火葬の煙が吉野の山（足立山）昇っていく。すべてこの地域での話である。間然する所がない。

「出雲」とは小倉南区に存在した古代出雲である。では「娘子」とは何か。その死を歌った人麿とはどんな関係にあったのか。万葉の「娘子」について西郷信綱が「梁塵秘抄」で考察しているので長くなるが引いておく。

次に万葉集の遊女資料を念のため拾っておこう。

冬12月、太宰師大伴（旅人）卿の京に上る時に、娘子の作る歌二首
凡ならばかもかくせむを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも
大和道は雲隠りたり然れども我が振る袖をなめしと思ふな

右、太宰師大伴卿、大納言を兼任し、京へ向かひて道に上る。この日に、馬を水城に駐めて、府家を顧み望む。ここに、卿を送る府史の中に、遊女行女婦あり、その字を児島と曰ふ。ここに、娘子この別れの易きことを傷み、その会ひの難きことを嘆き、涕を拭ひて自ら袖を振る歌を吟ふ。

大納言大伴卿の和ふる歌二首

大和道の吉備の児島を過ぎ行かば筑紫の児島思ほえむかも
ますらをと思へる我や水茎の水城の上に涙のごはむ

遊女が地方に赴任した官人らと馴じみ、自由に歌をとりかわしていた様子を知ることができる。かの女らは、家を離れた官人らの性欲の対象であっただけでなく、宴席には欠かせぬものであった。越中国守・大伴家持の周辺でも、「遊行女婦土師」とか「遊行女婦蒲生」とかが遊覧や宴席に臨んで歌をよんでいる。また家持の「史生尾張少咋に教へ諭す歌」（18・4106以下）は、都の妻子のことを忘れ遊女に溺れた部下を諭したものである。

万葉の「遊行女婦」の資料は、ほぼ以上尽きるが、その足跡はもっと広い地域に及んでいたであろう。傀儡子記は、東國の美濃・参河・遠江の党を筆頭に、山陽の播州、山陰の馬州、西海の党などをあげている。東海道筋が栄えるに至ったのは平安朝以降のことだとしても、その分布は思いのほか広範にわたっていたらし。万葉には右のほか、「石川太夫、任を遷されて京に上る時に、播磨娘子の贈る歌」（4・1776、1777）とか、「藤原宇合太夫、選任して京に上る時に、常陸娘子の贈る歌」（4・521）とかがあり、また遣新羅使一行の歌には肥前国松浦の「娘子」とか「対馬娘子」とかの歌が交じっている。これらはやはり遊女だろうといわれる。

人麿の「出雲娘子」も遊女と考えられる。「遊女」についても西郷信綱の考察がある。

ここに出てくる若い遊女、「空に登みのほる」歌声の主が、昔「こはた」と呼ばれた遊女の孫だといっている点である。このことは遊女にも筋、家系とでもいべきものが存し、これを通して芸が相伝されていた消息を語るものではないかと思う。職人歌合に絵師とか細工師とか楽人とかと並んで遊女が顔を出しているのは、遊女もまた歌を歌うことを業とする「職人」と

目されていたからだろう。そして職人である以上、他の職人と同様、その芸はたんに自然発生的ではなく、やはり相伝と習得の過程を経たものであろう。

「出雲娘」も歌を業とした職人だったのではないかと思われる。万葉はむろん歌集である。「歌」は歌われたから「歌」ある。万葉歌の時代、作られた歌は誰かによって歌われ、「歌う」専門職がすでに存在していたのではないか。人麿も歌の伝統の家で育てられた。人麿の作詞能力も西郷の指摘のように「たんに自然発生的ではなく、やはり相伝と習得の過程を経たものであろう。」と言えるであろう。

「作詞」と「歌唱」において相伝と修練があったと考えれば、人麿と「出雲娘」の間に作詞家と歌唱家という関係があったのではないだろうか。

伊勢の歌

伊勢國に幸しし時、京に留れる柿本朝臣人麿の作る歌

40 嗚呼見の浦に 舟乗りすらむ をとめらが 玉裳の裾に 潮満つらむか
嗚呼見の浦で船に乗る少女たちの美しい裳のすそに海の潮が満ちて濡らしていること
だろう。

41 くしろ着く 手節の崎に 今日もかも 大宮人の 玉藻刈るらむ
手節の崎では今日も大宮人が海草を刈っていることだろう。

42 潮騒に 五十等兒の 島辺漕ぐ 舟に妹乗るらむか 荒き島廻を
潮流がざわめく五十等兒の嶋のあたりを漕いでいる船にわが恋人も乗っているだろ
うか。荒い嶋のめぐりを行く船に。

この人麿歌を692年の持統の三重県伊勢行幸の時の歌だと読むことはできない。

- (1) この伊勢行幸は海路である。陸の風景は全く浮かばない。奈良から伊勢へは海路ではない。陸路である。この行幸は三重県伊勢への行幸ではない。
- (2) 京に留れる柿本朝臣人麿と題詞にある。この京とは天武、持統が居た京、太宰府である。
- (3) 妹と詠う女性は人麿が石見の國から京（太宰府）に移った後の妻であろう。
- (4) 五十等兒とは伊良虞と同じであろう。「玉藻刈ります」と詠われた麻統王が流された島である。
- (5) 嗚呼見の浦の満ち潮、手節の崎に生える海草、五十等兒の島の荒海等々、人麿の歌の情景は具体的である。人麿はこの伊勢に住んでいたかのように熟知している。
- (6) 三首の歌の雰囲気はなにやら楽しそうである。692年の持統伊勢行幸の厳しい雰囲気はない。

人麿の伊勢の歌3首は九州天皇家の伊勢への行幸を歌ったものである。「京に留れる柿本朝臣人麿」と題詞は書き、人麿が同行していないことは分かる。だからこの題詞は人麿が行かなかったということに重点を置いて書いたのではない。そうではなくて「京」に注目してほしいが為に書いたと思われる。この京とは太宰府である。

乙女たちが真っ白い足を濡らしながら船に乗り込んだのが「嗚呼見の浦」である。筑紫（博多）のどこかの港であろう。ここで乗船して伊勢國まで海路で行ったのである。

博多の「嗚呼見の浦」で美しい乙女たちが船に乗り込んでいる。乙女たちは裳裾を濡らしながら船に乗り込んでいる。「キャー、大きな波が来たわ!」「裳裾が濡れてしまったわ!」と乙女たちの歓声が聞こえる。人麿の恋人もその中にいる。伊勢神宮を参拝し、玉藻刈るのが目的の旅と

見えるが、これは楽しい旅である。伊勢に船で行くことを楽しみにしていた恋人を想い人麿も楽しそうである。人麿に幸せな歌は少ない。でもこの人麿は幸せなようで、私たちも幸せになる。



九州天皇家の伊勢
(行橋市養島の風景)

魚市場の先の交差点まで戻り、反対側の養島の南側に進みます。養島は、最高峰が60mの3つの山からなる風防灘の島でした。養島の南側の海岸から南方向の眺めです。海岸の南端には菅原神社があり、海の向こうに杵尾の沖合につくられている漁港が見えます。

<http://homepage2.nifty.com/kitaqare/kinn10.htm>

安騎の大野の歌

軽皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麿の作る歌

45 やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす 京を置きて 隨口の 泊瀬の山は 真木立つ 荒山道を 岩が根 禁樹おしなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉限る 夕去り来れば み雪降る 安騎の大野に 旗薄 小竹をおしなべ 草枕 旅宿りせず 古扨ひて

短歌

46 安騎の野に 宿る旅人 うち靡き 寐も寝らめやも 古扨ふに
47 ま草刈る 荒野にはあれど 黄葉の 過ぎにし君が 形見とぞ来し
48 東に 野の炎の 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ
49 日並 皇子の命の 馬並めて み狩り立たしし 時は来向ふ

分かりにくい歌である。作歌時期も分かりにくい、何よりも旅の目的が分からない。作歌時期は題詞に軽皇子と書くので即位前であろう。

689年（持統3年） 3月父草壁皇子が亡くなる。
7月伯父高市皇子亡くなる。

697年（持統11年） 2月軽皇子立太子。
8月軽皇子、祖母・持統天皇から譲位されて天皇位に就く。15歳

歌は「夕去り来れば み雪降る」と歌うので、晩冬から初春にかけての季節と思われる。「安騎」には天皇家の宮はなく、人麿も軽皇子も仮の宿に泊まった。

46 安騎の野に 宿る旅人 うち靡き 寐も寝らぬやも 古思ふに

安騎の野に草壁皇子の生きておられた頃を思っ旅に出て宿にとまっている。眠ろうにも眠れはしない。昔を思い浮かべて

「古」とは人麿の場合、九州天皇家持統の世をいう。この時すでに九州天皇家は持統と共に奈良に遷っていたのであろう。人麿はかつての九州天皇家の世を思い浮かべていたのである。九州天皇家の皇子、草壁皇子を偲んで旅にきて、仮の宿に泊まっている。草壁皇子がいた当時の九州天皇家を思うと眠ることができない。眠れない夜が明け、やがて草壁皇子が朝狩りに出発された時刻がやってきた。

草壁皇子にたいする追憶は九州天皇家にたいする追憶である。もし草壁皇子が夭折せず、天皇位を継いでいたならば九州天皇家は九州に存在したであろう。なぜ亡くなられたのか。

草壁皇子が橘の嶋宮（彦島老町）で亡くなった時、舎人の詠った挽歌の中に狩りの歌がある。

191 毛衣を 春冬設けて 幸しし 宇陀の大野は 思ほえむかも

草壁皇子は春と冬用の毛皮の狩猟着を用意して、宇陀の大野に出かけた。思い出されることである。この宇陀は小倉南区・長野である。大野の名は現在大野川の名前に残る。近江大津宮からそれほど離れていない。むろん、大野では外泊する必要はない。大津宮に帰ればすむことである。「安騎の野」と「宇陀の大野」は明らかに異なる。「安騎」では仮の宿に宿泊しなければならない。

昔、あなたのお父さんの草壁皇子は安騎の野に狩りに来られましたよ。今あなたも京を離れて隠口の泊瀬の山の荒山道を越えて来ましたね。夕方になればもう春というのに雪が降ってきましたが、この安騎の大野で旅の宿をとりましょう。

歌には「京」が歌われている。この京は奈良ではない。天武が居た京、乃ち太宰府である。天武崩御の時、持統と草壁皇子は太宰府にいた。その草壁皇子が689年に彦島の橘の嶋宮で亡くなった。持統は太宰府を去り、日本國の藤原京に遷った。以来一度も九州を訪れなかった。人麿が「京」と詠い、「京に残りて」と題詞が書いた「京」とは太宰府である。「神ながら神さびせずと太敷かす京」とは太宰府をさす。

では「隠口（両側から山が迫り籠もった）」の「泊瀬の山」とはどの山か。太宰府の近くに誠に「隠口（こもりく）」と呼ばれるにふさわしい土地があるか。朝倉市秋月城下町である。秋月城は黒沢明監督の名作「隠し砦の三悪人」のモデルとなった城である。秋月城は誠に「隠し砦」の名にふさわしい場所にふさわしく存在している。この美しい秋月城下町が太宰府の近くにあつて、人麿と軽皇子が来た「隠口の泊瀬」である。かつて「泊朝倉宮に天の下知らしめしし天皇」が天下を治めた都である。

人麿は泊瀬の山道を通って安騎の野にやって来た。その道は太宰府から東の76号線、200号線、438号線、66号線の山道を通って長谷山を越えた道であろう。

47 ま草刈る 荒野にはあれど 黄葉の 過ぎにし君が 形見とぞ来し

ま草を刈るような荒野ではあるが紅葉が落ちるように亡くなってしまった草壁皇子の形見（偲ぶ）のためにやって来た。

48 東に 野の炎の 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ

歌の原文はこうである。

東 野炎 立所見而 反見為者 月西渡

通常「東の野に」と訓んでいる。「炎」は「かぎろひ」と訓み、「曙の光」と解釈されている。

東方の野には曙の光のさしそめるのが見えて、西を振りかえると月が傾いてあわい光をたたえている。
(日本文学大系万葉集註)

だが、原文では「東」と「野炎」は分離している。5・7・5・7・7の定型に従って読むとすれば、「東」で切って「ひむかしに」と読むべきである。「野炎」はそのまま「野のかげろひ」である。「野のかげろひ」とは「陽炎」のことで、朝、太陽の光で野が暖められ水蒸気が昇る様をいう。どこでも見られる風景で、「曙の光」と解釈して、わざわざ探索するなどは必要ない。

亡くなった草壁皇子のことが思われ、眠ることができず朝を迎えた。太陽が昇り、山の頂から陽が射してくる。冷え込んだ安騎の野は暖められ、陽炎（かげろう）が立ち登っている。西の空には月がかたむいている。

人麿と軽皇子が宿をとった朝倉市秋月城下町は四方を山に囲まれた盆地である。

- 49 日並皇子の命の 馬並めて み狩り立たしし 時は来向ふ
やがてお父様の草壁皇子が馬をそろえて狩りに出発された時刻がやってきます。あなたの父上はここで朝狩りをされたのですよ。



持統の代の歌はここまでが九州天皇家で歌われた歌である。

持統の新しい代（近畿天皇家の代）の始まり

50番歌は九州天皇家の時代のうたではない。奈良藤原京で持統の帝宅を建設した「役民」の歌である。

日本書紀はなぜ持統天皇でもって終わるのか。それは持統の世に九州天皇家の歴史は終わり、新しく近畿天皇家の歴史が始まったからである。九州天皇家と近畿天皇家、その区分の要所に立つ天皇は天武というより持統である。天武は大宰府で全国を治めた。当然持統も大宰府に居た。ところが天武が亡くなり、後継者であった草壁皇子も689年亡くなってしまった。さて誰が全国統治を担っていくのか。自分しかいない。これが持統の決断であった。だが持統は九州太宰府で全国統治をしなかった。持統は太宰府から藤原京に遷った。遷ったというより戻ったと云った方がいいであろう。藤原京は持統の父、日本國天智天皇の京であった。

持統が奈良に遷都したことによって九州天皇家は終焉を迎えることとなった。689年、持統は太宰府から奈良に遷都し、690年元旦、藤原京大極殿で持統は即位した。持統のこの統治を万葉集は「藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代」と書いた。近畿天皇家の始まりを象徴する歌が藤原宮の御井の歌である。

奈良・藤原宮の歌

藤原宮の御井の歌

52 やすみしし わご大王 嵩照らす 日の皇子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始め給へて
埴安の堤の上に あり立たし 見し給へば 日本の 貴香具山は 日の経の 大御門に
春山と 茂さび立てり 畝火の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいま
す 耳成の 貴管山は 背面の大御門に 宣しなべ 神さび立てり 名くはし 吉野の
山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 嵩知るや 天の御蔭 天知るや 日
の御蔭の 水こそは 常にあらめ 御井の清水

持統は大宰府を去り、奈良藤原京に遷都した。それは草壁皇子が亡くなった689年の直後のことと思われる。草壁は彦島老町の九州天皇家伝統の橘の島宮で亡くなった。持統はその死をもって九州を去る決心を固めたように思われる。690年正月、持統は日本國の首都藤原京で即位した。そして多くの事業を手がけた。一つは自身の宮の造営である。その宮の名前が「藤原宮」である。この造営を藤原京造営と取り違えてはならない。藤原京はすでに存在した。藤原京は日本國が造営したものである。持統政権とは無関係である。持統が九州から関西に移ったときには既にこの京は存在した。

持統は日本國の京の中に自分の住居を建設した。藤原宮の御井の歌は持統の近畿天皇家の始まりを象徴する歌である。

日本書紀には藤原の宮造営に関する記事がある。

持統4年(690)10月29日に、高市皇子、藤原の宮処を觀す。公卿百寮従なり。

持統4年(690)12月19日に、天皇、藤原に幸して宮処を觀す。

持統6年(692)5月23日に、淨廣肆難波王等を遣わして、藤原の宮処を鎮め祭らしむ。

持統6年(692)6月30日に、天皇、藤原の宮処を觀す。

持統7年(693)8月朔に、藤原の宮地に幸す。

持統8年(694)12月6日に、藤原の宮に遷り居します。

天武の居た大宰府から藤原京に移ってきた持統は自前の宮を藤原京の中に建設した。それが藤原宮である。完成は持統七年(693)年、翌年この新居に移った。

人麿の「遠の朝廷」の歌

柿本朝臣人麿、筑紫國に下りし時、海路にて作る歌二首 304
大王の 遠の朝廷と あり通ふ 島門を見れば 神代し思ほゆ

大王の遠い朝廷へと多くの船が向かっている。島門を見れば神代のことが思われる

「大王」とは持統天皇である。その持統の朝廷は「遠の朝廷」と詠われている。通常この「遠の朝廷」とは太宰府と解釈されている。この歌の意を理解するには持統期の日本の特異な政治状況を理解しなければならない。「朝廷」とは宮ではない。また「都」でもない。「都」とは「宮処」の意である。天皇の宮が存在する処が「都」である。しかし「朝廷」とは「大極殿とその前庭」を前提とする特別な用語である。大極殿が存在するのは京の宮城である。「遠の朝廷」とは「大極殿と前庭」が存在する京を意味する。「持統の遠の朝廷」とはいかなる京か。

持統期は「近い朝廷」と「遠い朝廷」の二つの朝廷が存在した特異な政治状況にあったのである。その二つの朝廷とは大宰府と藤原京である。この二つの京は西と東に存在した条坊都市であった。大宰府は天武が居た京である。持統もこの京に居た。ところが、689年草壁皇子が彦島老町の九州天皇家伝統の橘の島宮で亡くなった。持統はその死をもって九州を去る決心を固めた。

持統4年3月20日に、京と畿内との人の、年80より以上なる者に、嶋宮の稻、人ごとに二十束賜ふ。
(日本書紀持統天皇)

「嶋宮」とは草壁皇子がいた「橘の嶋宮」を云う。稲を蓄えていた「橘の嶋宮」とは彦島老町の九州天皇家伝統の大宮である。その「嶋宮」の稲を「京と畿内」の80歳以上の老人に配ったというのである。この「京」とは日本國の首都・藤原京である。持統は藤原京に遷るに際して大サービスをした。持統は天皇位継承する予定だった最愛の息子を失ってしまった。他に継承者はいない。自らが継承するほか道はない。

「九州を去って奈良で全国を統治しよう。」
「橘の嶋宮に蓄えている稲はもはや不要である。」

690年、嶋宮を廃し、蓄えていた稲を藤原京に運び、畿内の80歳以上の高齢者全てに分け与え、藤原京に移った。

この九州から奈良への遷居はどのように行われたか。陸路か海路か。その情景を歌ったのが人麿304番歌である。

大王の 遠の朝廷と あり通ふ 島門を見れば 神代し思ほゆ

「遠の朝廷と」は「遠の朝廷へと」と訓むべきであろう。「遠の朝廷と」では意味が未完成である。持統が居る遠い朝廷へ、まるで蟻の行列のように列をなして船が通っていく。

これは九州から奈良への大移動の情景である。持統が大宰府を去って奈良・藤原京へ遷居すると共に九州天皇家の王朝人もまた奈良に上京した。持統の居る奈良へ、奈良へと大船団が瀬戸内海を東進していく。人麿はその情景を歌った。「遠の朝廷」とは奈良藤原京をさす。

歌の作歌場所は「島門を見れば」と詠った島門である。島門とは彦島小戸の出入り口を云う。人麿は島門を見て神代を想起していた。神代とっていろいろあるが、人麿が想起したのは神代のどの出来事か明白である。

それは「國生み」である。イザナギ・イザナミは「天御中主神」が作った弥生集落「高天原（彦島老の山）」から「大八洲」建設を目指して出征していった。関門海峡の周辺の島々（或いは半

島)に存在した「淡路島(若松区)」、「伊豫二名島(彦島老町)」に存在した「淡國」「土佐國」「伊豫國」「讃岐國」、「隠伎三之子島(下関市伊崎町)」、「筑紫島(門司)」の「筑紫國」「豊國」「肥國」「熊曾國」、「伊伎島(門司区)」、「津島(門司区)」、「佐度(門司区)」、「大倭豊秋津島(大積)」を「大八洲」として統合したのである。これら「大八洲」建設の大事業への出発が彦島小戸であった、「彦島小戸」が「島門」である。

イザナギ・イザナミを祀る神社としては兵庫県淡路市(旧津名郡一宮町)多賀にある伊弉諾神宮(いざなぎじんぐう)が有名であるが、現淡路島はイザナギ・イザナミが生んだ古代淡路島ではない。この島が淡路島という名前になったのは八世紀である。國生みの事業を終えたイザナギが淡路島に「幽宮」を構え、そこで亡くなったという史実を踏まえて、現淡路島に伊弉諾神宮が作られた。いわば後付のイザナギ神宮である。イザナギ・イザナミを祀った宮は本来の國生みの舞台であった企救半島にある。「戸上神社」である。

戸上神社は福岡県北九州市門司区大里戸ノ上4-4-2 旧豊前国 企救郡にある。

上社と下社に分かれているが、祭神は天御中主神と伊邪那岐神・伊邪那美神である。また合祀されている神は奥津日子神・奥津比賣神・須佐之男神・大山祇神・大穴牟遲神・少名比古那神・豊日別命・宇迦之御魂神・保食神・高淤加美神・高淤加美・闇淤加美命・罔象女神・建御名方神・猿田彦神・安徳天皇・平宗盛である。



安徳天皇、平宗盛は別として、天照大神の弟、出雲王朝の創始者、須佐之男神、出雲王朝の王、大穴牟遲神、その息子の建御名方神、そして天孫降臨を先導した猿田彦神と古代世界の名だたる英雄が祀られている。戸上山からの眺望はイザナギ・イザナミが國生みに出発した島門(彦島小戸)が見える。イザナギ・イザナミを祀るのにこれほどふさわしい場所は他にない。

blog.livedoor.jp/renazopapa/tag

この國生みから約千年ほど後の672年に天武は革命を起こし、日本國天皇家を打ち倒し九州天皇家が初めて天皇の位置に就いた。この天武の壬申革命はいわば当代の「國生み」というべきものであった。

人麿は“現代の天武・持統夫妻の國生み”と“神代のイザナギ・イザナミ夫妻の國生み”を重ねて新旧の二つの国家誕生の歴史を詠ったのである。

伊邪那岐命、伊邪那美命によって建設された大八洲王朝、それを引き継いだ神武天皇、神武の天皇家の天皇、天武の代に日本の支配者となった。九州は華やかな都となった。この國生みの事業を引き継いだのが持統である。

だが、持統は天武が全国統治した大宰府を離れ、日本國の首都藤原京に遷ってしまった。持統の朝廷は人麿にとって「遠の朝廷」となった。九州に残った人麿にとって持統の朝廷は遠い遠い存在となった。

九州天皇家は持統の奈良遷居とともに歴史から消えていくこととなった。九州天皇家の都は廢墟となった。人麿は滅びゆく九州天皇家への鎮魂を歌で果たしたのである。

大王の 遠の朝廷と 蟻通ふ
島門を見れば 神代(思ほゆ)

島門
(彦島小戸)

巖流島

戸上山から彦島を見る

<http://sankoukiroku.nobody.jp/tonoue.oodaigahara.htm>